

「マスなき時代の事業開発虎の巻」

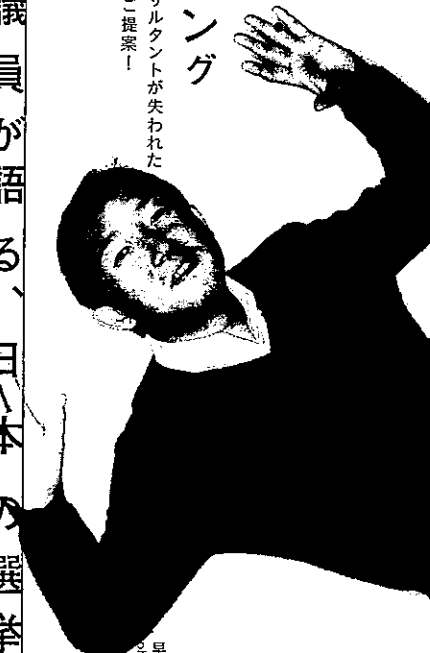
# クロサカタツヤのネオ

## ビジネス・マイニング

通信・放送、そしてIT業界で活躍する気鋭のコンサルタントが失われた  
マス・マーケットを探索し、新しいビジネスプランをご提案！

第15回

### 「元祖ツイッター」議員が語る、日本の選挙とネットのホントのところ



早船 健一 写真  
Takahashi Ken-ryu

今月のゲスト

橋本 岳 (はしもと・がく)  
1974年岡山県出身。衆議院議員(自由民主党)、  
厚生労働大臣政務官。慶應義塾大学大学院政  
策・メディア研究科修了後、三菱総合研究所に入  
社し情報通信分野の調査研究に従事。平成17年  
の衆議院選挙で初当選し、現在は2期目。自民党  
でも国会対策委員会副委員長など要職を務める。

クロサカタツヤ  
1975年生まれ。株式会社 企(くわだて)代表取締役  
後。クロサカタツヤ事務所代表。三菱総合研究所  
にて情報通信事業のコンサルティングや国内外の  
政策プロジェクトに従事。07年に独立。「日経コミ  
ュケーション」(日経BP社)、「ダイヤモンド・オン  
ライン」(ダイヤモンド社)などでコラム連載中。

テレビの視聴率など、多くの人々による人気や支持率の調査は数あれど、国民の大多数が参加する国政選挙ほど大規模にマスの意見を集める仕組みはほかにない。単純な有権者数だけでも4900万人に意思表示を求めるといふのは、考えてみたらかなりスゴイこと。だが、残念ながら投票率は年を追うごとに低下しており、選挙そして政治ですらマスの崩壊の可能性が取り沙汰されている。その一方で、ネットをほじめとする新しい技術によって、人々とコミュニケーションし、意見を束ねようとする試みもある。だが、かつて希望に満ちていたツイッターも、気がついてみたらクソリブと炎上にあふれる日々。果たして、ネットと政治の距離は近づいたのか？遠ざかったのか？

クロサカ ネットが社会に浸透する中で、通信手段としてだけでなくソーシャル的なものが社会システムに入り込んできています。そのひとつが、選挙運動におけるインターネットの解禁です。ネット投票はまだ実現途上ですが、選挙期間中の広報活動が認められるようになり、有権者が選挙へ臨む際の情報収集は大きく変わって来ます。今回は、そのネット選挙の解禁にあたって大きな役割を果たした、衆議院議員で厚生労働大臣政務官の橋本岳さんがゲストです。

橋本 クロサカさんと大学、大学院、職場と、20年くらい一緒に机を並べていましたね。  
クロサカ 岳さんは、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の金子郁容研究室①でネットコミュニケーションの研究に没頭されていた頃から、有名人でした。そんな、国会議員の中で最もネットに詳しいおひとりである岳さんに、敢えて伺います。先の衆院選において「投票にインターネットを参考にしたか」②という世論調査で、87・8%の人が「参考にしなかった」と答えていました。「参考にした」は9・7%で、あまりの少なさに僕は驚いたのですが……？

橋本 うーん、まあ、こんなものじゃない？むしろ上出来というか。  
クロサカ ええ!? それでいいんですか(笑)。  
橋本 実際に選挙を戦ってみるとしみじみわかりますが、新聞や街頭演説などメディアが多数ある中で、どれを参考にするかは有権者によって異なります。ネット選挙の解禁は、参考にすべきメディアが、ひとつ増えたにすぎません。これまでもネットでの政治活動は可能でしたが、ブログなど期間中は更新できなくても、残しておくことができた。ネット解禁でも、有権者が新たに得られる情報量が、極端に増えたわけではない。僕自身は、1割も参考になつた人がいたことにこそ注目したい。

クロサカ 日頃からネット上で政治活動を行っていたら、選挙期間中じゃなくても、自分の主張や政見を伝えることはできるわけですよね。  
橋本 もしかしたら9・7%という数字には、そういう人も入っているかもしれないので、この調査がネット選挙の効果を正確に示しているとはいえないですね。ただ、小選挙区は、たとえ51対49でも相手を上回れば勝ちです。そういう制度において1割の人が参考にしてているなら、きちんと取り組むだけの意味がある。  
クロサカ 確かに、有権者の1割は、勝敗に影響する大きな存在です。岳さんは、今回の選挙で、ネットでのような活動をしたんですか？  
橋本 まず、ウェブサイトをリニューアルして、政策や実績などのコンテンツを充実させました。

#### ① 金子郁容研究室

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の、金子郁容(かねこいくよう)教授の研究室。専門は情報組織論、ネットワーク論、コミュニケーション。

#### ② 投票にインターネットを参考にしたか

時事通信が1月に実施した世論調査。2014年12月の衆院選の投票に際し、インターネットを使った選挙運動を参考にしたかどうかについて、2000人を対象に個別面接で行ったもの。

#### ③ マイクロ放送局

本来は電波法に規制されない範囲で実施できるミニFM放送局のことだが、ここでは他社に内容を編集されず自分で自由に情報を発信できる独自メディアという程度のニュアンス。

それから、普段からSNSもやっていますが、選挙期間中は小まめに更新する余裕がありません。その代わりにUstreamを使いました。クロサカ あれ、割とフツーですね。

橋本 僕は、自分の普段の活動をそのまま見てもらおう方がいいと思っただけです。選挙期間中は、基本的に選挙カーに乗っているか、演説会や集会をしているので、事務所を不在にしがちです。そんな場合でも、スタッフにスマホを持ってもらって、常時Ustreamで中継すれば、見ていただける。最終的に、延べ2000人くらいの人に見ていただいたはずですよ。

クロサカ ネットをマイクロ放送局③として使ったんですね。自分のあらゆる活動がそこに集まっています、あちこちで見ることができると。

橋本 国会議員は日頃の仕事を国会や官庁でやるので、その様子が地元選挙区にいる人にはさっぱり見えないというのは大きな悩み。地方の場合、選挙区は面積的に広いですから、ひとつの場所に滞在してられる時間は、選挙期間中に合計で10分くらいのもので、ネットをうまく使うことで、そうした課題を少しでも解消できたなら、個人的には成功だと思います。

クロサカ 岳さんは、まだツイッターが今ほどメジャーではなかった09年に、「ツイッターと政治を考えるワークショップ」④へ、ツイッター議員のひとりとして参加されています。でも最近では、ツイッターでは積極的なコミュニケーションはしていないんですか？

橋本 実際にそれを実践している方もいるし、間違っているとは思いません。なにより、僕自身も学生時代や三菱総研在籍時から、電子会議室での政策形成ということを研究してきました。

でも、正直なところ、ツイッターに疲れちゃったんですよ(笑)。

クロサカ その気持ち、よくわかります(笑)。

橋本 真面目な話をする、今の日本は間接民主制に基づいて国会があり、そこでの本会議や委員会、さらに党内の会合など、たくさんの議論の場とためのルールがあります。こうした仕組みには、それなりに合理的で意味がある。一方、ツイッターなどで民主的に議論を行うためには、場を仕切るルールやツールがまだまだ足りない。そうした状況下では、議論すること自体が大変難しい。民主主義を実現するのに、ネットだけにこだわる必要はないんです。

クロサカ 間接民主制は集団から代表を選んで、その人に間接的に自分の政治的な主張を実現してもらおうもの。一方で、その代表者がツイッターに参加すると「オレの質問に答えろ」「オレの話の聞き」という声に晒されてしまう。間接民主制で選ばれた人が、直接民主制のような振る舞いを求められるわけですね。課題はあっても、それが機能しているから日本は安定した社会である。だとすると、政策論争とか合意形成といった政治に必要なプロセスを踏んでいく手段として、直接民主制的な性格の強いネットは、有効なのか、疑問に思えてきました。

橋本 例えば、大臣に対して要望を伝える際に、メールはオススメしません。大臣ともなれば、一日に大量のメールを受け取りますが、それを読む時間は非常に限られている。それよりは、地元の議員を介して、議員同士のつながりで要望を伝えてもらった方が確実です。しかし、ネットがダメなら、電話だったら疑いなく信頼性の高いメディアなのか、ハガキならどうなのか、

ということはケースにより異なります。どんなツールも一長一短なのだから、うまく使い方を考えるべきです。

クロサカ 人間である以上、完全なコミュニケーションの手段はあり得ないので、メールでダメだったら、新たなアクションを検討するのが人間の知恵であるべきだと僕も思います。でも、公職にある人や著名人に対して、常に完璧に対応すべきだと言う人たちがいます。ツイッターでもフォロワーが多くなるほど罵詈雑言や「クソリブ」の数が増えますね。

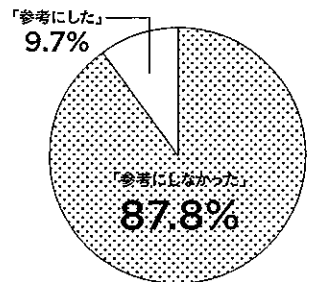
橋本 僕がツイッターを真面目に使っていない理由は、そこにあります。

クロサカ 一方で、年明けに行われた佐賀県知事選挙では、いわゆる「落選運動」⑤がネット上で展開され、対象となった穂渡啓祐候補は落選しました。彼は、確かに政治や行政の手続きの正当性という観点では相当危うい人だった。それがことさらに強調され、投票行動になんらかの影響を与えたようです。

橋本 まだ分析の最中だから、僕も軽々にはコメントできませんが、逆にクロサカさんはどんな影響があったと見ていますか？

クロサカ 地域ごとの投票結果などを見たことと、何人かの有権者に聞いた程度の、雑駁で定性的な分析ですが、当選した山口祥義候補への投票に寄与したのではなくて、「面倒だから選挙に行かない」という気持ちになって、投票率の低下に寄与した可能性はありそうです。選挙に対して前向きな有権者が、ネット上での落選運動に触れ、社会システム全体に対するモチベーションが削がれた、という話は耳にしました。

●世論調査  
「投票にインターネットを参考にしたか」



出典:2015/01/16時事通信

●ツイッターと政治を考えるワークショップ

橋本氏のほかに津田大介氏などが登壇したイベントで、クロサカ氏が発起人のひとり。当時は米国内でオバマ大統領をはじめ著名人や企業がツイッターを利用し始め、またイランでは反体制運動に活用されるなど、社会とツイッター(ひいてはインターネット)の新しい関係確立へ大いに期待が盛り上がっていた。その頃、日本の議員でツイッターをやっていたのは、まだ橋本氏と蓮坂誠二議員だけだった。

●落選運動

佐賀県知事選挙で、穂渡候補に批判的な人々が、ネット上で同氏の業績を検証するサイトを立ち上げ、ツイッター上で穂渡氏への批判を繰り返していた。過去の国政選挙でも党や候補者へネット上で批判が集中したことはあったが、地方選挙でここまで激しい落選運動がなされたことに一部で注目が集まった。

橋本 当事者が言うのもどうかと思いますが、ほとんどの国民にとってちゃんと仕事してくれば正直、政治家は誰でも良く、選挙も面倒かもしれませんがね。その上で、そういう人たちがいかに投票に行ってもらうか、ということを生懸命やるのが僕たちの選挙運動という仕事です。だから選挙へのモチベーションを削ぐのは、実に簡単なことです。そう考えると、佐賀県知事選挙に対するクロサカさんの分析は、なきにしもあらず、だと思えます。

クロサカ 人の気持ちをくじかずに、少なくとも投票には行ってほしい。そういう前向きなアクションにつなげていくために、僕らはネットとどう向かい合っていけばいいのか。強烈なブイスリ合いの弱肉強食のネットのままでよいのでしょうか？

橋本 選挙に限って言えば、ネットにこだわる必要はないのでは？ 僕は今回の選挙で投票に行かなかった方は「今回は自民党が勝つても差し障りなからう」と判断されたのだと思っています。言い換えれば、この先に自民党が信頼を損ねたら、今回は投票に行かなかった人が、大挙して足を運んで違う人に投票するでしょう。

今の小選挙区  
比例代表並立制  
は、政権交代が  
起きやすい制度  
なので、いかな  
る選挙の結果で  
も、それが永続  
すると思ってい  
けない。日本  
人は、投票に行



大学、会社員時代から先輩後輩関係の2人。忙しい政務の合間をいただきつつも、フランクな対談となった。

くべきだと思っただけ行くんです。

クロサカ 郵政選挙の時などは、そうでした。

橋本 だから、投票率が下がっていることには、そんなに危機感を持っていません。でも、いざという時のために日頃から、ネットでも新聞でもテレビでもよいから、政治のことをウォッチしてほしい。なんなら直接会いに来ていただいてもかまいません。

選挙の勝ち負けは天の思召しなので、結果は甘んじて受けます。でも、自分の本来の姿ではないものを見て判断されることは、とても残念なんです。だから、ネットを通して、人となりや政治活動をきちんと見ていただけると本当にありがたいし、僕らにできるのは日頃からそういうものを用意することだと思います。

クロサカ 特定の論争のためのネットではなくて、日常のためのネットであるべき。本当に自分が判断して、行動をしないといけないときは、特別なイベントに惑わされることなく、動くということですね。

橋本 誰かの扇動に乗るとか、マスメディアが書いていただけを信じるのではなくて、自ら情報を選択できるのがネットメディアの可能性です。僕は、そういうネットへの役割に、これまで以上に期待しています。



—対談を終えて—

対談をまとめながら、文中にもあった09年の「ワークショップ」を思い出していました。それまでブログ中心で活動していた岳さんをけしかけて、日本で何番目のツイッター議員にしまった張本人のひとりとして、私自身も社会変革の可能性を感じて

いたのは、紛れもない事実です。

あれから5年。選挙活動でのネット利用は解禁され、選挙への影響も取り沙汰されています。一方で岳さんも私も、ツイッターに代表される「あらゆる人との全面的な直接対話」というネットの使い方は、距離を置きつつあります。ネットと政治の距離は近づいたのかという問いに、岳さんは「日常を表現するための手段」としてのネットに、活路を見いだしていました。地方選出の国会議員にとって、東京を中心とした自らの日常を表現するツールとして、媒介者たる情報メディアのバイアスがからず、自らを表現できる、ということですね。

これは私たち市井の人間も、ある意味で同じです。「政治」を「生活」と読み替えば、親として、配偶者として、職業人や地域人として、私たちは日常生活の中で、さまざまな顔（ペルソナ）を使い分けて生きています。でもそれを、他者が理解するのは、容易ならざること。

そうした日常生活の機微を改善していく手段として、ネットの可能性はまだあります。むしろそれが、誰にでも使える形にはまだ実装されていないのかもしれない。

冒頭のワークショップを仕掛けたほどなので、ツイッターに対する私の期待はとても大きく、ある意味でその幻滅を味わったあと、「ネットの限界」をしばしば感じていました。

しかし、話を進める中で、ネットはまだ始まったばかり（あるいは何も始まっていない）という、岳さんの実践者としての姿勢を見て、ネットに対する前向きな気持ちと、まだまだ自分にもできることがあるという「予感」が、私の中で蘇ってきました。